古今和詩集抄

三下

伊地知文庫
文庫20
310
4

伊地知氏書册

雪ふれば木毎に花そ咲よりる冬こそ春の梅とはつきそ
木毎にと梅とはいふ字とよりとはいふ不用
ふ八義なり

紀友則

秋はきぬ年はきぬれと冬草の枯れ人人書張りせす
冬きぬれとくハ新年の事し歳暮し能也
雲かる奇とそ
ゆくとし

元亨二月

あらたまの年はとりよかる毎に雪も秋物も山ゆきまさりて
ふ新しく紀奇くし毎年してめさしてくし
きめるふと新なりはりの人てふ人知れ
雪ふりて年の暮ぬる所よりそ花のかりこちの松も
乃くれ

文庫
210
4

貞松院深寒さうやけ井ゝりみちぬとい
ふゝ〻おりひとちむ心さなりし池
水日といひそ〻ぎて書てゐ手の門流てゐやき月日ハルミチノツラキ
人のゝいかゝ〻ゝ年もめ出し出ゝこと書り
ゐも家書の筆母はへけり ツラユキ
四年のおくもゐ海と浪ゝ新ゝへは書ねとゝへ
四月ゝりゝもゐ海ゝ年く深ふとゝろへ
きゐゝと又一年もゐゝていゐと井かけく
ゝかゝ書の行ゝきゝ一きかまされゝ

賀哥　賀八祝ゝ　二十二首　撰人不知

我君ゝ無ゝや代ゝ行ゝゝの代ゝ君のゝ心
八ゝ代ゝりゝわゝもゝりゝやゝてゐゝゝ
四ゝ流ゝ濱の真砂とかゝへつゝ君ゝゝゝゝ数よせん
四ゝ流海ゝ海の底ゝ名ゝ哥ハ尽ゝ一ゝ四海
ゝりゝゝゝ

ゝゝの山ゝゝの松ゝ復ゝ君ゝ代ゝとハやちゝゝ
ゝゝ山ゝゝの松ゝ復ゝ君ゝゝゝゝゝゝゝゝ
松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

仁和の御時僧正遍照に七十の賀給ふる時の御歌

おもひよそへつるなるべし　遍照山さくら
とい孫と云さし國ゝ海なりこそ
ゆりとやりへうん　私云
我よりは春八代代の春をへてさくらの花を見
八重ゝ咲てへて　紅梅合　神のんしけはよ
我とも云へ　志井て　歌ゝや
かゝりとたに角ゝ　春八代代ゝ
くゝ　かひ　ゝ
ゝん　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
遍照　ゝ

仁和の帝の大子、おりゐ給ふ時に、れおハの八十の賀よ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

僧正遍照

子ゝ振袖やさくらん
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

十リ　ヒラ

桜花ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

紅のコレ　ナカ

亀のおれ山の嵐ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

桜川の大臣の四十賀の家ゝ時ゝ

実時のこまめ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

かれハきみによせ仍て又風情ともよむ哥也

一サダヤスノミコノ后宮の五十の賀たてまつりける屏風に桜の花の散る下に人の花見たるかたかけるをよめる

徒にすくる月日ハおもほえて花見てくらす春そすくなき　藤原オキカゼ

此哥ハことしけく賀部に入ぬハいかゝとあり
年月ハすくるとなからはなくなりてはなすして
花を見る時をひさしく思ふなるへし中又
文字をみるへし人もあり流ハあしき
為しとそ

一モトヤスノミコノ七十ノ賀のうしろの屏風によみて書ける

春くれハ宿にまつ咲梅の花君か千とせのかさしとそ見る　紀のツラユキ

やとにまつさくとハ梅ハ花のさきかけなれハ也一本
の花咲と云とを云り心ハ切なる心さうの
義也前にさき咲しもをしんるいや

一いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためし君にはしめむ　ソセイ

説てわれ思ひ起くハかくて前代ハ神代の御代の
心ハそくしみひろハりを君にこめおハしれハ
神そ志るを祝ふらんとこ君をそ祝ふ事と云
とくハ此哥よりはしめたとれりふとそと云
是為の心よりて子細おもひゆへとそ

一藤原三善の六十の賀によみ侍る
此哥或在原ときはるのともいふ

鶴亀も千とせの後ハしらなくにあかぬ心にまかせはててむ　在原シゲハル

義なし此哥右近に在原のこ記ちるもとも
昔も同胞の儀をされハ同胞とてましむるハ
めてたきの事ともれなしきとこを人の名哥と

いまこの哥とおほせわ後ハ門まうちとさり
てけりけんまとめましハちんしかんなまる人の
寄名もうひかれ紀之黄門のうゑハさめなるハ
めでたの方とぞ

よしこねの帝ありつ
四十の賀ハ娘
みかとりくよろこ
ばせける

萬代を松によそへて君をいはふつまをせの新よもん　ソセイ法師

松りしかさどりていはふ義之格の宮のんとこ
ものしハ侍るりや此うのんももへ下

内侍のかみの右大
将藤原の朝臣の
四十の賀しける
時に四季の絵
かける後の
屏風に書たり
けるうた

長月雅の家ちつとりし萬代といはふ心ハ祈て新りん
此哥ハ延喜九年内侍のかみ満子の
二兄之右門の右綱母がりし右門を崎るハ本
家なかり和泉大将定国の四十賀を此宿

のこし給ふ素性法師にてよませらる
屏風のしかけの哥之屏風に四季ハ縁よ
合てよめる之哥ハ義なし

夏

山高み雲井に見ゆる桜花心のゆきて折らぬ日ぞなき
此哥ハ哥之心詞ともよせ二帖哥とそ
珍き声ならなくに郭公ここらの年をあかすもあるかな　躬恒
貫之之哥之義なし但わかきとも云のゝ紀
わかりや　私云

秋

住吉の松を秋風吹からに声打そふる沖つ白浪
み門様の哥之秀逸の哥とそ
千鳥なくさほの河霧立ぬらし山の木葉も色まさりゆく

忠岑うの歌に遠白川とは山の木のたちまち
おりつるのうんぬんなり

秋ぐれと雲もうつるぬきの山とは木の葉と風とを
作る国理なりいと又云こと所りみちと風の
かとしとは落葉を吹ける所にわたりとよ
そは紅葉をとる所吹来る風とは法
とは此の山も素戔嗚の杖のさ海りなること
風をうつるとは云こと又法こと
き紅葉の山風なり海とは落ることも云り
法華も見る
白雪の降しく時はみな山の山風に乱て落る

ちらしくはかとへて見るへうとは力と今とせ
も乱て散るなり紅葉遠とは英之
う奇なり此七首素性奇なり作為
て抜出なり此作為は人なり屏風奇
歌入りなるとて此歌を歌とする屏風
乃奇も素性奇なり屏風
歌もる不分明此時素性なり
配分してよまれは素性奇のやうう
へこと所此集は定人の撰者なれは歌
ひとくは英之一人う歌りなること此集の奇
をみる所門の此奇うなると云なりひも

あまた侍りしかども一人の名あり

曲侍藤原ヨルカノ朝臣

と侍りけるとぞ

東宮の生れ給へる時及第り

書うるとて長月の山に出る月の照りてくもらぬ

紫宸殿の西方民なれいかすれ山を見いるこ

哥ハ後考

こしん

離別哥

題しきりにとゝ

三十一首

立別れ三月の末の花ゆゑ春の惜しきに行く年

待人ゆゑにわが宿の松ぞ千きりとりもん

まち人も待しなとゝ云ん歌ゆゑ云ハ

歌ハ花ゆゑ云ん歌ゆゑ云ハ

歌ハ花ゆゑ云ん歌ゆゑ云ハ

歌ハ花ゆゑ云ん歌ゆゑ云ハ

ヨミ人不知

すかるなく秋の萩原あさたちて旅ゆく人をいつとかまたん

すかるハむしのたくひ也萩さかんなる比にとも

色ききてたちてあさたつ人をいつとかまつ

となり

限なき雲井のよそに別るとも人を心におくらさむやは

是ハ我旅立ゆくとよまれけるか人をハ心におくらさし

かきりもなき雲井とは遠くへ行て遠き心也

小野ノチフルカ陸奥(みちのく)のスケニマカリケルトキ母のよめる

たらちねの親のまもりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

千古ハ遍(へん)昭(せう)か子也

たらちねの親(おや)の守(まもり)とハあひそふる心はかりハせきなとゝめそ

大やけことにつかはさるゝのなれハいとゝむへき

ことをなけきハいはひそへてまもりせよ

せきなとゝめそと云ハ関(くゑ)へハゆくと云ゆりわたとも

人とゝまりてゆるさるへきをなるへし

心はかりゆくへし

サダトキノミコノ家ニテ藤原キヨフカ近江のスケニマカリケル時ニムマノハナムケシケル時ヨメル

紀ノトシサダ

けふわかれあすはあふみと思へとも夜やふけぬらん袖の露けき(さ)

秋や又ねらん袖の露けきとかゝれたる本もあり

ふかくそ人のなけきそ侍るとさも

いふハ心ゆくよなるを工(く)夫(ふう)あるへしと也

越へまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけと春霞立わかれなは恋しかるへし

霞ハ物をへたつる物なれハ枕詞なり

わかるへきなり　又云かへるされてわかれはかなしからん

事となけくよし

人のむまのはなむけにてよめる

をしむから恋しきものを白雲の立なん後ハなに心ちせん　紀ノツラユキ

をしむから恋しきとは恋しからむ事のや
うくもりしらぬ義なれハ立別てハいかなり
心ちせんとなけく義也をしむからや
かて恋しきんも侍るし

友たちの人の国へまかりけるによめる

別まてハ程をへたつと思へやかつ見なからにかねて恋しき　在原ミゲハル

あつまの方へまかりける人によみてつかハしける

おもへとも身をしわけねハ目に見えぬ心を君にたくへてそやる　イカコノアツユキ

おもへともとも云よんおもはくこゝろをそふる
こゝろをなくしわけまちのそてハらる
人とわかれし名残おしくおもふあまりなり

とゝむるなしひけもゐつさなれハせめてハ只
をとゝひてもあまれなかそ人とも世にあさう
ぬ由ハそれもうなはとあとゝいはとゝあれ
なれ物なれハおすゝめりんてねんちろを
おそくつくるとゝもと云る祝ハさ文字なれ
さかりはほうねく詞なり

あふ坂にて人をわかれける時によめる

あふ坂の関しまさしき物ならハあかすわかるゝ君をとゝめよ　難波ノヨロツヲ

何ふといふ字母はわかもと関といふん為計と

題しらす　読人不知

唐衣たつ日ハきかし朝露のおきてしゆけハけぬへき物を

此哥アル人司ヲタマハリテアタラシキ女ニツキテトシヘテスミケル人ヲステヽ只アスナンタツトハカリイヘリケルトキニ

おきてし旅けハこれわしくおもなくもあり
猶かれんとされしとも我そきてもとゆふ

トモアウモイハニ
ヨミテツカハシケル

ふるかなる古道をたづねてもとんわすれぬるかな
ひんなる哥こ

宗龍

ヒタチ（マカリケル
トキニフチハラノキ
ミトシニヨミテツカ
ハシケル

わさかけてたへき君とて数よりの品へ立ちる第よ梅こ
朝ちけハわさゆ小ふ面業毋代的ゆりとよ
ふ事れ有事も多後とそこ人ゆとり見
ゆ第よ梅いこ梅といふこと文云者こ立人第

紀ノムネオタカ吾妻
マカリケルトキニ人ノ
家ニヤトリテ暁

義なしてそれハ梅ゆりゆ侍ん　ヨミ人不知
えそ〜ぬ海ん見よ奉ゆ義や立ちこ人やとゆと
出タツトテマカリ
申シケレハ母ノ
ヨミテノイタセリ
ケル

えそ〜ぬとこ云ちり限侍ゆるこん見よいと
ゆ見へきのんこ

アヒシリテ
侍リケル
人ノ吾ツマ

雲井ゆも母ふ心のそくれ梅ゆりるとん人見ゆりこ
フカヤフ

ノカメ（マカリ
ケルナチクルト
テヨメル

雲井（空）きんこ義なし

夜の吾妻（白雲の立ちくふゆ立ちきんとぬきこそく梅ゆ
マカリケル時
ヨメル

ちゆくこうなくこ氏義人の三ちきよなる紙ゆ
んとぬさそハ梅りひくこ侍んとゆ見
ぬさこうこそ人ゆこ

ヨシミチノヒテ　ナカ

ミチノクニマカリ
ケル人ニヨミテ
ツカハシケル

白雲ハ立ちにくちふ侍ん人こんへこうな
上方ハ限ゆなくこ遠さんこ梅りん人こんへ
そ見ゆそハ梅とけこそ影へこうこ高
かゆ海きこ侍ゆ高こ

ツラユキ

人ヲ別ケルトキ
ニヨミケル

別きこそ事ハ長毋ゆ高こ海ゆ梅ゆ見
んわこハこ

相知リケル人の越の国ヘマカリテトシヘテ京ニマウテキテマタカヘリケルトキニヨメル

かへる山なにそハありてあるかひハきてもとまらぬ名にこそありけれ

わるそかひハ行そそてきこくこともしぬしとの
名にたゝるかひまてと眼ひらしし

越の国ヘマカリケル人ニヨミテツカハシケル

よそにのみ恋や渡らん白山のゆきみるへくもあらぬ我身ハ

雪もそりこゝろ之下白んと奇へし　貫之

オトハ山のホトリニテ人ヲ別ルトテヨメル

音羽山木たかくなきて時鳥君かわかれをおしむへらなり

木たかくなきてむかしよそかる別を
さてふんてく時鳥しも君かわかれをたれ
しむやとこきくへと木たかくなく切なる
ふ出りるゝ

藤原ノノチカゲカラモノノ使ニ長月晦カタニマカリケルニウヘノヲノコトモサケタウヒケルツイテニヨメル

もろともに鳴てとゝめよ蛬秋のわかれハおしくやハあらぬ　藤原のかねもち

唐物の使とは唐船の来朝の時
の使なり官庫のはこりなれハきましくとも
秋のわかれおしくやハあらぬもと日人ハおなし
と秋のわかれといへりとかけしと云

秋霧のともに立出て別なハ晴ぬおもひにこひや渡らん　平元則

のふさ波へきりこそ秋霧のはれぬおもひを

源ノサネカツクシヘユアミシトテマカリケルトキニ山崎ニテワカレオシミケルトコロニテヨメル

旅にさへ別さ破わかれふれりや

命たに心にかなふ物ならハ何かわかれのかなしからまし　白女

女の身にてわかれもかなしけれひへて人
待る人さしや立へるまての命あらハなし

源サ子

山崎ヨリカミナミノ森ヲ〳〵ナガラ人〳〵マカリテカヘリカテニシテ別レオシミケルヨメル

今ハ是ヨリカヘリ子トオモフナカ云ケルナリヨミケル

人命ヲ道ヲ思ふ人ハ君ヲ思ふ人ハ世ヲ捨テ人ヲ海ト命ヲ山ト思ふ人ハ

の大切なれ

後京加藤左衛門

ちるられてきたり心の力あれば海ゆきあはもよいとも

人を思ふこころぶかくもまさるもとゝ

はるされはゆくゑぬ人ぞ山ゆくや　ツラユキ

フテハラノコレヲカヽムサシノスケニマカリケルトキニナクリミアフサカヲヲコスルトテヨミケル

別れてを別れも海ゆ人たのめかるゝ

ちりぬるとて山ハ山ゆ人たのめ

ちりぬるとて山ハ山ゆ人たのめ

大江ノチフルカコシ嶽マカリケルムマノハナケニヨメル

春ちりぬ白山ゆ人ハ

雪ちり山ゆ人ハ

後一カ子スケ朝臣

人ノ花山ニ詣キテタヲリツカタメカヘリナントシケルトキヨメル

ちるれ海ゆ人ハ山ゆ人ハ

人のゝ花ゆ人ハ

遍照

雲林院ノミユノ舎利會ニ山ノホリテカヘリケル二條ノ花ノモトニテヨメル

山風ゆ梅吹ゆ人ハ

僧正ヘンセウ

山風ゆえに山風のうちふかれてえんこ青き
なんいろみそれよりとんるえんぶ（ゆったりかも）
みれしれんこのみこ法ひやしの親王（えんりの）
ゆえ所の花を尋ねて白ちなんうえと花のうさぎやい（ユウセン法師）
世帝のふい花れしろ宿の（えや）花れるれしろ
きとえいは立海る所しとかしていうやうう
う移りきれりて喉紅かしいは嘉さまえ
くるかへうえとい花のうえりていかれを
花りしこうして云んこ

兼盛法師

わしもして別れ（かなしき）涙流（なき）ちそふ水海さるやをいこ（由イ）
ゆるしいい門をの事えんいわしへ　ゆんん

仁和帝大子ニオワシマシケル時ニフルノタキコラシニオロシマシニノカハリタマヒケルニヨメル

カニナリノツホニメシタリケル日オホミキナトタウヘテ雨ノイタウフリケレハユウカリマテ待テマカリ出侍リケルサリニサカ月ヲトリテ

秋萩の花を雨ふらせたるとこそ（ツラユキ）
ふいさで切れる袖

三河ノ国ノ人

兼盛王

おしまん人れんと思ふ秋の時ぬさ方そふ
ひくおい雨ふる方と花ふくふいふふな
ふ花をいおりしまきれとくゆうやうの
心なりんおりふ袖くえれなる奇こまへの方
よりと入ふるみやこ花

新恒

別れと嘆（うらく）ぬもうとと宵ふる雨ふ花を
花ふしふ云ふしふ袖ふ花（華）
のふなれ

陸人不知

あるとして別るる神の白玉と君う魂ふ袖ふ
そしに

兼盛王ニ初ク地法ノ別ノ時みよめる

かみてふ山もとの水のうすくこほりたるを前の時の
海の面とうらうんとせんとて
陸奥の国に海よりかちある絶えたる所にわん日まそよ
かうりたるなくみんをこれかりの義
かたをもてはこれをうんとあまきをもてさせて志をとめん
をとこはうるうんとの人のこゝろあり き義のんを
しめびかるへかきてしてもうれはあり
よりとこゆるうしふせんとこれまきをのか
はをしふをてうへうを
をとこてもり人をとうん橋記明まとあるとあるふ色
ふいちりもぬうてせうく記ゆへやとまるを

志賀ノ山越デ石井ノミヒトデモノイヒケル人ノ別ケルヰリニヨメル

ふんこ

ツラユキ

持ちよの別れ濁る山井のわれても人ゆゑ思はるれ
あるくも人よのあるくとせさら
なれ云不用れ俗の事こゝあさき水なれハ
みむ見人ハふちりてんり波見せぬ事をあ
かてもとは人ゝをへゝるをは奇後成つ
概しかりをる奇これ所行給 トモイリ

道井あ(ヒ)をう人侍車ゆ物ヤいひつゝて別をう所ゆ

常の常れるふくゝりるをりをてもあるん
常ハめくをとをりあふれなれいかり
車ふいひてをうををあるこあまこハりめくをり
ををををををんをりや

羇旅哥

旅の[illegible]路と　　十六首

安倍仲麿

モロコシニテ月ヲミテヨミケル

あまの原ふりさけ見れハ春日なるみかさの山に出し月かも

此哥ふりさけと云ハあまりの義[illegible]
あふさけて見るハ又引さけと云儀もあり提の
ふな[illegible]ふりさけハ[illegible]
ふりさけとハ[illegible]
ふりあふへし[illegible]
りさきもとふりふきかるハ[illegible]
なれとも[illegible]
手裏にへたてる[illegible]

オキノクラテ流サレケルトキニ船ニノリテ出タツトテ京ナル人ノモトニツカワシケル

山[illegible]月[illegible]とは云ふや仲丸ハ元明元正
両代の[illegible]人と[illegible]ありし
[illegible]
[illegible]
も[illegible]
と[illegible]
我朝[illegible]
つ[illegible]
あ[illegible]哥[illegible]送る事[illegible]

読人不知

哥不知

我[illegible]
かつらき山[illegible]

比京ハアル人ノ云伝本人ヲ
ヶ也

しきりてうらやましやや
かれくせ明石の浦の名所ふ潟ふ書り母とそ
見渡ふ潟ふ船おりし人のとしてと送て
よりる奇かりの石れ浦ハ道ひこたへハ明
石の浦ふもと母出てとれ出ふ人の沖者ふ
とと作りもおりおあさ書れ出てくること
立てある所ハかとにかもとみやうふれゆる
おりゆくもはるうれたりしまふ潟ふ見
もてはるとと月ふ明くふ数くらんいやふ
ふ数めんかくひとくかくもとおりひやう
うかるを大うふ臨の色さへあとれ母ふか

初書曉比伊勢物語

なくもはるとあて万里れ波濤とおりよ
人のふれとれ数ふんとおりひ海るふ人か
きりれふ新うふ海へさふとて比京臨ふ今
れ奥義ふ書と病なせ京用ふ奇ふを
忠流ふ秘とる事ハ人調とれかりて京
も幽玄ふ云ふなけそふ脱情あまハふ奇
道の大切ふ書ふて専可治てと義
友とふふ人ひとふとうてとさうけふ色の白ひ
幽玄かふとそ
ナリヒラ
が数さふく別れつまハふくさはる臨て
う数ハきてなくくまんるふ紀つとく

ともし字九画ときはかなれめしはなれわれ
もやハ年をへてかならずしも妻とならわれハ
あらん九切する事はよき事くきめぐ勝なし
そらふとうるきこともく勝とをそたなりよんを
かくへきりしそんハわまかてこと兼ぬる
もとこよく叶へきと世
ちやあれのまゝくれぬといひぬれハ　日もくれ
ぬとかけ又ありし家のかけ母は日の字なし
又荒春法師のかりしは在しく不定事九日
くれぬてそ九は前りそてハいわるへき事と世
極式とすとくなりいへてとまるへしかきなり

かく書くときはふなとはれといふするとみなへ拙
りひしくてといふハ勝引れハかなしれよろへて
ところへさかるんありまりかならんへかなきか
もかくも二条殿のこしよかろへうまたる大るる
歌よりたかりよ人の事といふからへしけて中段
勝くさなかし

名所にわつかき事とかん歌る秋をよく人ハありやなしやと
歌出ハ去る歳されくしきてひかんいひある
奇のんハめぐと

清人不知

也もり鳥をかくあるれ生てあし数ハたくてそ海ろてうる
ハ在のほりよれてそちり歌よくや

東のかたより京へまゐりてくるそ
乃ゆくへあり

山くまなきの霞をうらめしきの川まを折れさうしんかうん
ひ奇しもまち分侍りて後にかりの人よりなれく
ナハかりまうせうくに折とたのこ所をもりひ
ゆくのかりに折の山もとくかすみ〳〵たてくさうひを
山へたるあとをかなしひ今そうんかり色ハ濃しうつ
書うつるうしいりり可尋へ　郭恒

越の玉（まうりなり
ときかの山のやうく
ヨメル

消なる所にたれ越後なる白山の名ハ雪かをそをそる
奇ハ義なりこと事ふ所を臨新うへ　ツラユキ

束（マロリケルトキ
道ニテヨメル

ことひる物なりるふ別後のんかそくもれもかゆる
後なり恨なくき奇へ

カヒノ玉（マロリ
ケルトキ道ニテ
ヨメル

和とをそ見とく初雁と掛つ〳〵ゆるの杭ようあまくひ新道
ミツ子

但馬ノ国（マロリ
ケル時三見ノ浦
トヽ市ニトマリテ
ユウサリノカレイヒ
タウヘケル人ニ所浦
ケルツイテニヨメル

初雁とをひくこそ〳〵遠き臨のんかうへ
義家カチスケ
夕作和れ行つかれをもくる和をもくる
大くる夕作和れかれかれをもくる和の月ハまくるを
見ハひるハをや寄て和の月ハまくるを
夕和物つれ和のこ海もたかれかれ見ハ
ゆくこそ見やくひふくこれ夕作和杭朝
かくる月よ立こ　ナリヒラ

特ふし七夕作めよ雁うんをれ河原ふ秋ハきりうる
作めハ書こ義なり　アリツ子

一こそよ一年をひきまを雁ハ宿ふと人をもしとそ
雁まて〳〵行の字こ年二度なりてハうよ

もゝのうちなりけいとゝいふうたをもあるしとし
ひさしをひいぬさゝをゝ為人をゝ西山の紅葉の源氏のまふく　菅原朝臣
あれはてゝひいなの家こゝに幸ゆきゝ此時ゝ侍りけれいふ三笠
のんとみりてうとうてりたんとうれい山の紅葉
とそのまゝゝ西山とゝ
ゝ西山ゝ神ゝきゝ海へきゝ紅葉ふかゝゝ林やゝん
早下のんゝ同御幸の時ゝ舟ゝ心ゝゝいゝ

第五段の物語
ひさしをひいぬさゝを為人をゝ
ゝ西山の時ゝ手向
山ゝゝ侍ゝ

ひさしをめひさしをもゝ幸たゝいゝ有物ゝ天地
ゝ本寂寥能為ゝ万象ゝ通ゝ時ゝ不測ゝ
ゝ頃ゝゝゝゝ能ゝ動物ゝゝゝ
国名おゝとゝせゝ
出ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風月の道若ゝ朋友のまゝゝ治世撫民の
嫌生死の始末とゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四十七首

をりくして第十よしをとわめり

うちひさ

ふしの新の新おそはらつて鶯とれとそるのかく為ん

新りたつて春の殺しの新よりはるくうひ

はをそうしもふんしをしるいたるこの春なりへ

時鳥

をへさはとと新るあまや約束て時なる故の人をよ

ふへきの人の時をれいうもんひなれて大るこの人と

さへ動せさすると

うけせん

流のうせをれいをそ新をうひろて神よるるふんや

在原ちけもち

愛なりかれ人間をれ宝珠なりともるへき

みちなるをいをしものとへ　主生忠岑

殺をもれをてををまやれんそれとうせん

ふいを神なりけるをるをとうちうけせん

とりふん

う新ん

あをうめにけるかるへをんを為ん物へき者ハ白

ありうめをいを新をるんをあれうをを切て

めをとを切るふんをへ一番ハ白ひつて新

なをの白ひのりをれかをきやうの事を

ものふけるかるへをんをとハ世ひ時

終もるを法性と万物法性なれとも実に
それとハかりに名ハ白ひてハ法ハつねやうの是
為ハ名人きハ法性の理をさとれとも世明法
性ともよそに并りて海とかり法性ハ名
位り世間ハ変化と法性ハ名ハ変
かりきはしわるうめとは用前の名の
常かりの事こ二ハかるの時はかりかりも
名ハりくもおもりりこ一如りれも
法性もの常かりへくもれてのの縁
かはさくく

ツラヌユキ

別あとも波のかりふいさてれて風吹毎に深きの

う紀しのむ世とハ水のあはれつくとは桜
ふりもとりかもと上りもくそるむのそ
こ世かれんて下のん間かりんをりてん
浮へきし波の人のの不定の縁こんれんハ十
年二十年かれくくも名れぬ拍こんれか
くて名れの世おりもの不定みて名
まのこの不実かれも波の中おいさく
拍ていハ世こ風ての事ハ拍とくく云者
のあの事とりんこむへれりろいひ
かも親こ先とはこうやを行へいさもかき
やうのるのくんもの同実とれと行江の

さもあらはあれたとへなりけり
ともしれかし
とかくうきしみなれはうるはしともとのいかなるにてよ
うきの花は数をとうくいものうきなるへし
とのいかなるくとはかなふとかくなるかなく
かりんいよ月夜なるをと観するゆへ
かりそめの花
あふさものゝ秋を照されは則まんと過てよへい
義なしかれん長者家難の理をは歎くはし
きをしへし
みちのあれ

ふり序
小野小町 ちけかな

足引の山をも晴まも雲のやとり定めぬ世にもそれ
風も定めぬ世よそなれそれとも旅なとといはい
おかへしはとる秋万歳とみてなるへのこ人
千代上句ハ席之
なかの度の木
みよし野の吉野の瀧よりおちわたるたまのさま
わかはなけり
風さしかおの木
秋かきねしとや度の紀のさかくも秋あくまん風のさむきよ
ゆなり
わかい かつる
とゝろん
山の紀といふさくなる標し

友則
讀人不知

かくてもわれはひのまれかなる人をいつくしこふ人をへさ
義孝
命はかぎりあるものとはしりながらなほ我つくさるやうにはさ
思思のんこしのんこ人めとりこして実孝
とはいへどもわやまちとすべきこころはつひ
のまれなるいそぎのんこ首尾のわもぬ
事と風する
くるふ　ほうこんの歌
数ならぬ後はくるふ数記を首しるすも思ふて
なりてハ蜻の記りはふんこしのんこ我んの
ひく物と記したらふ物みる江なる事を

僧正遍昭

心ゆるもれとなり人ハいそうこ人義するのいさめこ
ひ帝淡後の時屈くく上ゝしのんとをくこ
後ハくくふなとゝ人ハ記のこめひなさやうよ
なれいこ記実とまれとをりとを
さうい

ツラユキ

我ハけさうハかそ見ける記の実とわくなるものこいろ
記のるよさける記とんくこいよそとは云こ
わくなる物こいへうりくるとは云
後なる記もみわるんもこ

トモノリ

九こなへ
白雪を見たゆくやうの記とも義いとこ人

義なし

湖水とゝそはちつゝ紅葉んとしてその山ゝ〻ゝ〻ゝ
紅葉りんとうつて紅葉りなりまくも
賀山とゝ行くしるんるこゝ序に紅葉を
そふとくのんこ

ツラユキ

小倉山みねたちなしし鳴鹿のへよりん秋を志る人そなき
いく世の秋とゝかへよりんこゝよりん時雨ありるこ
そのく名の奇とゝ見てこゝ秋ゝ過さそ

トモノリ

きちかうれもれ
秋ちう賀八成よりり日数のとゝろ来ゝ交うゝ明
面うしやくまの交うゝひゝゆゝ紅こゝ下ゝん

（朱筆院の女房元合の時よ世ゝ紅へ三云 交字と句のかしらゝ亦ゝ違ゝる）

（えんえん）若葉の中ゝとゝの木ゝ行くゝ紅ゝいゝとゝくく
きんゝも人ゝもゝかゝゝゝゝゝ井よゝその交
わゝゝれゝゝやうゝ紅ゝゝ
志ゝ行ゝ

後人昌和

ゝゝゝゝ紅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝ流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

友則

紅葉の紅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
賀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

わりなくいたりもとりもあつまりとのさま

たとへば

ありとんて軽もそかさき雲端の世とかなしとやいはんん

軽もそかさきいたのまれるきなるもんに一切有

為の流涙の事

弟子あり

弟子ありとや紀の友をんんとく白房の澤ろそりを

紀の友をも弟子ありようぶくしをといんろへきふ

わるもそくしいろももろれき房の赤わさをれい

なりやのんおろ云今色　鮮矣仁の徳

めこにあり四ものれ

紀トシサメ

文屋ヤスヒテ

二條の后妃宮の侍臣赤つ中
多信時朋一一一
さきりるを
後世語る事

紀の末りよわるそうるめとを咲よりるぬりれのこなる時もれ

迷懐のんこやのん宿位なとりるあ中さ人の

かるとを風もるなも

去のよくさ

山るこ時ひし嵐の吹里八白しもわへも紀そちりろ

上八ぬこやのん紀をを八はやもろきうけくしさ人

りだろん仁のんなさ人れやの井道ある人いとく

南りかさき風なり

屋まう　出八宿よ

弱のいさせいまこ八常よ

紀称と云もれ山いも真を云徳

部云者の雲りや南りもたいるこ八をけこみりうもなさ

平アツユキ

義孝

かつらもり

雲雀のうゝ人毎よとうもまて山のもゝとゝ見ぬそ思き

俊なりトのゝ人を雲雀のうゝ人ゝ木ことゝ思とハ一切衆

生の徳ゝとたゝふまてハ道のうりなさとたゝ

とへいとゝ思ハ道のうりなさとたゝ

ゝ思とハ和子のゝ人

かとれくさ

曉月義孝ふゝなくさまんうゝ夫毎もわるゝを

義なりトのゝ人の歌情と風とる

さかりあけ

ヨミ人しらす

フカヤフ

タカムコノトシハル

義孝ゝ一さかりとゝ見ぬくそ霧ハそ見ゝ

義なりトのゝ世ゝとゝ世ゝとゝ世ゝ

ゝ人のゝ事のゝと風とる

みてゝ

いちとそ思ふゝ見ぬ物ひしゝ思ゝ人の思

そ思ゝ見ぬハ

門竹　河竹とハ中殿の竹とも云ゝ也

さ和ゝ見てかゝゝ月の月映ゝ秋のやま風

ゆゝ

ゝ

物たりゝ夢の歌を推ゝ人を待そゝん

シケハル

カケノリ王

シセイ法師

[illegible]

さゝ　まつ　ひは　はせを

いさゝめに時まつまにそ日ハへぬる心ハせをハ人にみえつゝ　キノメノト

此の哥ハいさゝめハしハしと云心也

みつ時もある日をへて心のほとをしられてこそ

なからぬ事をよめるに成就すへき所を覚悟し

てたのむ心への心のよしへし

なし　なつめ　くるみ　兵衛

あちきなしなけきなつめそうき事にあひくる身をハ捨ぬ物から

人ハ嘆くともたゝひ入て吟味すへし

からことゝハ琴の事そ春のしらへある日　安倍清行

浪の音のけさからことにきこゆるハ春のしらへやあらたまるらん

義なし

からさき

梶にあたる浪の雫を春なれハいかゝ咲ちる花とみさらん　カ子ミノ王

打ちる花なれハとて云への義なし

からさき

かの方にいつからさきにわたりけん浪路ハ跡ものこらさりけり　アホノツ子ミ

義なし

浪の花沖から咲て散くめり水の春とハ風やなるらん　伊勢

義なし

かみやかハ　ツラユキ

うち出の浜の秋風やうらん流の新しかれる白雪
あらいそ
ちはやぶる
足引の山のよそをれいはせよきりの晴るる間なき
ゆくんゆうかる舟し
かりの
なつ草のうへ分る泥水のゆくさ方のかさりつんで邪
ぬさ
かぶりのうなかさとりつんようるし
秋くれと月のうつれやかるひるとと紅とちるもみ
楼の炎いうつまさに行るし舟い義カ

メハ三子

深ノ口ニ

百和香　ゆきせたなさとの名し

深人不知

花とみわうと花しく風ふくそうく秋くこそ
あらとい風うあうとちうくかう義明し

三市ちう

さかりかうさかうさかうせい秋ろ屬ハ分てこそ
なりれしいやとめ字し 風物

故ノ良香

れき夫
なうれ出る方たりたてい源川れきひん時や底いちうし
かうくよんてくねとハ雨をちうねと云んくれき
ひん時やとは大ろさいひん時ハそこもちうれ
のんし

△時の斉清之人のいひあれハ後ろ

僧正聖寳

大江千里

ちさとは

のちまれのこくれてかゝるこゝろなしれ給ふと

義なし下の人学問の道によし学せば

かさりなるましき義也

又これは此ゑそて世くなりゆくをうけて△

花のちるをにわくやとて心ゆくは心をとゞめ給ふなり

めぐみわくやとくは目を海のまたとつやとてなり

もんさちりて花わかれし此題は詠

なんはよはいやと下の人一切その三昧によへと

されは人ハ三昧りたゝふと山林にも市わり市

にも山林なるかし聖寳の心なれハ也

なるへし聖寳ハ醍醐開山清瀧一流の源なり

僧正也正の字をそへに後の事ハ黄門の

古実なりとこそり此集の時ハまた権僧正にわ

らと後権僧正せられしハ正の字をそへらる

となりされともよむ時ハ僧聖寳ともよむへし

此抄ハ黄門のそもに申給へ子細ハ絶たり

り僧正聖寳と作るるをもそれを後のさ

まてと又ご後の権家の理をもわかつし給へ

おかるへし